

研究助成（2009年度募集）研究実績報告書

代表研究者	関西大学社会学部心理学専攻 教授 富田 拓郎
研究テーマ	事故や災害による死別体験者（被害者・被災者遺族）における長期化悲嘆症状と他の精神症状、および対処行動やレジリエンスに関する研究

< 助成研究の要旨 >

< 大きなトラウマ体験（犯罪，自殺，事故，災害等）のあとに、どの程度の人々が心理的に問題を抱え、どうやってその後の人生を生きるのか：インターネットパネルによる全国調査 >

人間がトラウマとなる出来事を経験するとさまざまな反応が生じる。このうち、悲嘆反応や精神症状・精神疾患がその後どの程度の人々に生じるのかについては、わが国でも大規模災害など、被災者の追跡調査可能なケースで多く行われてきた。しかし犯罪や自殺、あるいは事故といったケースでは追跡調査が容易でない場合も多く、これまで全国規模の調査はあまり行われていない。大きなトラウマを経験した後にはどの程度の人々が心理的な問題を体験しているのだろうか。この問題を今回は検討することにした。全国のインターネット調査パネル登録者から抽出された約5年以内のトラウマ出来事（犯罪，自殺，事故，災害）の経験者を対象に、長期の悲嘆や精神症状に関するアンケート調査を行った。

（調査対象者と方法）

ネット調査会社に登録されたパネル90,000人にインターネット・スクリーニング調査を行い、今回の調査条件に合致する対象者は278名であった。このうち本調査への協力同意が得られた216名を対象に、謝礼同封の上、質問紙を郵送し、189名（男39名，女141名，不明9名；2010年10月現在）から返却を受けた。一連の調査は2010年6月から10月にかけて、手続きを全て調査会社に委託し実施された。調査したアンケート内容は、

- 1) 長期化悲嘆障害（悲嘆反応が長期化してしまうことで日常生活に支障が出てしまう問題）（PGD; Prigerson et al., 2009）症状項目
- 2) 精神症状の有無を簡単にチェックするリストの項目 であった。

（結果と考察）

調査時点でPGD症状を5つ以上満たしたのは30名（全体の15.9%；以下同），抑うつ22名（11.9%），パニック発作29名（15.7%），PTSD症状76名（41.1%），自殺念慮32名（17.3%）であった。

一般人口中に生じる平均と比べると、特に5年以内のトラウマ経験者ではPTSD症状，パニック発作，自殺念慮が多く見られ，強い精神症状を経験する人が多いことが示された。

今後は激しいトラウマを経験した当事者（被害者，被災者等）の気持ちを第一に考えながら，医療だけではなく教育・福祉・司法などの関連する他の領域や専門家と協働し，適切なフォローアップを行うことが必要であろう。